ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

お姉様と別れてから、俺は真っ直ぐマンションに向かった。

お姉様曰く、今日は三人とも学校を休むらしい。昨日からずっと、俺を探しているそうだ。本当に申し訳無い。

　マルクスさんは『迷惑をかけたのは誰だか本当に分かっているのか』と言っていたが、俺のしてしまったことは『迷惑』なんてレベルでは済まないだろう。

　入口の指紋認証機に人差し指を押し当てると、ガラス戸が無機質な音を立てて開いた。

　たった一日いなかっただけだが、随分久しぶりにマンションの中に入った気がする。

　階段を使う気にはなれず、エレベーターを使って五階まで上がることにした。普段あまり使わないので、ボタン操作に少し手間取りつつも、取り敢えず目的の階に到着する。

　エレベーターを降りた俺は、ふとそこで立ち止まった。部屋はこの近くなのだが、

「俺、手ぶらだよな……」

　そう呟いて、自分の両手を見つめる。謝るのに、はたしてこれでいいのだろうかと思ったのだ。

　菓子折りとはいかずとも、せめて缶ジュースくらいは持っていくべきではないだろうか。

　だがそこで、俺は手持ちが全く無いことを思い出す。着ている服以外は、本当に何も持たずに出てきてしまったのだ。

　急に不安になった。

ただ謝っただけで、果たして三人とも、自分を許してくれるのだろうか？

「い……いや、大丈夫だ。多分」

　小声でそう言って、俺は拳をギュッと握る。

　恐る恐る部屋の方へと足を向け、歩き出した。

　数字にしてみれば、たった十数メートル程度。だが、今の俺にはその距離が数百メートルにも数千メートルにも感じられた。

　それでも、俺はそこに辿り着く。

　戸って、こんなに大きかったっけ？

「そういえば、あいつ等はいるのか？」

　何気なくインターホンを押そうとした俺だが、重要なことを失念していたことに気がついた。

　お姉様は『今日は皆学校を休んでいる』とは言ったが、『ここにいる』とは一言も言っていなかった。

　あ、でも。俺は確か、お姉様にマンションへ向かうことはちゃんと言った。もしここにいないのなら、あの時そう伝えて下さるだろう。

　いや、でも。俺にうろつかれるよりは、いっそマンションの方に待機させておいた方が面倒が無いと思われたかもしれない。それならすれ違うことも無いわけだから、あえて仰らなかったという選択も勿論……

　……怖がっているな、俺。

　結局、なんだかんだと理由をつけて、俺は皆と会うのを先延ばしにしているだけなのだ。

　これからもあいつ等の仲間でいたいと思うのなら、まずはちゃんと、向き合わないと。

　三回、深呼吸をしてから俺は、インターホンを強く押した。

「……」

　無言のまま時は過ぎる。誰かが出てくるような気配は無い。念のため、もう一度鳴らしてみるが、結果は同じだった。

　いないのだろうか？

　首を傾げながら、俺はなんとはなしにドアノブを捻り、引いてみる。すると、驚くことにあっさりと戸は開いた。

「なんつー無用心な……」

　そう呟きながらも、俺は気が気では無かった。三人もいて、鍵を閉め忘れることなんて流石に無いだろう。

　あれ？　もしかして居留守を使われている？　もしかして、超怒ってる？

　まあ、そりゃあ勝手に家を飛び出していった挙句、連絡の一つも寄越さなければ怒りもするだろう。それだけの事を、自分はしてしまったのだ。

　だがしかし、まさか居留守を使われる程とは思っていなかった事も事実。お姉様にあまり強く叱られなかったので、あいつ等もきっと『プンスカ』くらいかなぁ、なんて甘い期待もしていた。

　もしかすると、愛想を尽かされたかな、俺。

　一瞬にして暗い気分になって、思わずここから逃げ出したくなる俺だったが、それはグッと堪えた。

　それでは、何も変わらない。意味が無い。

「た……ただいま……」

　小声でそう囁きながら、俺は部屋の中に足を踏み入れる。ひんやりとした空気が、俺の肌をそっと撫でた。本当は三人に呼びかけながら進みたいところだが、生憎そんな勇気は無い。

　抜き足差し足で奥に進む俺だったが、リビングが見えてきた所で足を止めた。

　いた。

　顔は見えないが、レイ、樹葉、詠がいるのを見てしまったのだ。

　三人とも、テーブルに突っ伏している。自分の顔からサーっと血の気が失せた感じを覚えた。

　どうしよう。本当に居留守を使われていた。これって相当怒ってるよな？　ここまで近づいてまだ気がつかない――多分その振りをしているんだろうけど――くらい、頭にきているのか？　やばい、どう謝ればいいだろう？

　一瞬でそんなことを思ってしまった俺だったが、そこでとあることに気がついた。

　耳をすませば、なんかスースーという音が聞こえることに。そしてその音は、テーブルに突っ伏している三人から聞こえてくることに。

　もしかしてこいつ等……怒って突っ伏して俺に気がつかない振りをしているのでは無く、ただ単に寝ているだけなのか？

　と言うか、よく考えてみれば、居留守を使うなら鍵は閉めておくだろう。もし中に入られたら居留守を使っていることがバレてしまう。それでは意味が無い。特に、今回居留守を使うのは俺なのだから、その危険性は十分にあったはずだ。現に、こうして俺は入ってきた。

　何故、そんなことに気がつかなかったのだろう。自分が途方もなく馬鹿なことを考えていたことに、どっと疲れが出てきた。いっそ、こいつ等と一緒に寝てしまおうかと本気で考えてしまった程だ。

　だがそこで俺は、もう二つ、あることに気がついた。

　一つ目は、三人の着ている服が、昨日と同じものであったこと。同じ服を二日続けて着ていることなど、いままであっただろうか？　それに……こう言っちゃ難だが、服が少し臭う。

そして――

　どこか、いつもと違う気がする。俺はそう思った。

　三人とも、寝てはいるが……服の隙間から薄らと覗くレイの肌のツヤはいつもと比べると少し悪いし、詠もいつも綺麗な髪の毛が何かいつもと雰囲気が違うし、樹葉の頭のてっぺんからチョコンと伸びるアホ毛もどこかクタっとしているしで、それが何を意味するのか……顔は見えずとも、俺はすぐに分かった。

「ほんと俺って、何やってんだろ……」

　三人を見ていると、胸が苦しくなる。

　余程、俺の事を探し回ったのだろう。俺が思っているより遥かに、三人は心配してくれたらしい。

　申し訳ないと、この時心から思った。

　さて……ところで、だ。そう思うのと同時に、俺は三人の背中を見つめながら逡巡していた。

「起こしたほうが……いいのか？」

　自分が帰ってきたことをすぐに伝える方がいいのか、それともゆっくり寝かせて置くままにしておく方がいいのか……どちらが三人にとって良い選択なのだろう？　普通に考えれば前者だ。三人とも寝てはいるものの、多分まだ心配している。その心配を払拭してやるのは、迷惑をかけてしまった俺の義務だろう。

だが、昨日からずっと俺を探してくれたのなら、きっと疲れは溜まっているはず。無理に起こすのは、あまりにも酷というものではないだろうか？

暫く一人でウンウンと唸る俺。迷いに迷った挙句、俺はそーっと、人差し指で一番近くにいた樹葉の肩をツンツンと叩いた。

前者を選んだのは、正直、消去法的な考えからだった。このまま三人を寝かせておくままにするのは、それこそ自分のしてしまったことから逃げている気がしたのだ。レイ、樹葉、詠には悪い気も勿論するが、これが俺の三人への礼儀だと、そう思ったのである。

ただ、肩をつついたくらいでは流石に起きない。揺らすのは何となくセクハラチックになる気もして、それ故に何気なくその行為を続けていた俺は、ついうっかり、本当にうっかり、指を滑らせてしまった。

滑ってしまった指は、思いっきり樹葉の頬に直撃する。

「……ふにゅぅ？」

「おはよう」

　動揺しながら、俺はそう言った。

　時計を見れば、今は八時半。学生が起きるには、いささか遅い時間帯だが、この挨拶で間違ってはいないはずだ。

　と言うか、今の樹葉の声はなんだろう？　ちょっと可愛かった。

　……うん。現実逃避は止めよう。

「……すまん。指が滑った」

「……っ？」

　謝ると、俺の目と樹葉のトロンとした目が合う。樹葉の瞳の輪郭がだんだんとはっきりしていき、ビクンと体を揺らせて樹葉は起き上がる。つられて俺も仰け反ってしまったことには気が付いていないようだ。

あまりに突然の事で驚いたようだが、逆にこちらが驚かされてしまった。

「ロ……ロランっ？」

　素っ頓狂な声を上げる樹葉に、今まで寝ていたレイと詠も何事かと顔を上げる。

　最初は随分と寝ぼけ眼だった二人だったが、俺の姿を確認すると、揃って声にならない声を上げて立ち上がる。

「あー……なんだ、その……」

　三人を起こしたら言おうと思っていたことがあったのだが……さて、俺は何を言おうとしていたんだっけ？

「ちょっ、ロランっ？　あんたホントにロランっ？」

「いままでどこにいたんですかっ？」

　驚き唖然として、その場から動く様子のない樹葉とは対照的に、レイと詠は俺の肩を掴んでブンブンと激しく前後に揺らして質問してくる。

「いや、あのだな……」

　何か言おうとするも、二人の質問の猛攻は止まらない。まるでせき止められた水が、一気に流れ出したかのような幻覚が俺には確かに見え――

「だあぁっ！　うるせえ！　俺に喋らせろっ！」

　ついうっかり、俺はそんな怒鳴り声を上げてしまったのだった。

「……えっと、怒鳴ってごめんなさい」

　それから数分後、一応落ち着いた俺達四人は、テーブルを囲んで座っていた。暫く沈黙が辺りを支配していたのだが、俺のこの謝罪により、それは破られる。

「あー、まあ、いきなり色々捲し立てちゃった私等も私等だし。こっちこそごめん」

　バツの悪そうな顔で、レイがそう言ってきた。向かいに座る詠も、申し訳なさそうに頭を下げてくる。唯一、樹葉だけが、黙って俺のことをジーッと見つめていた。

　彼女は一体、何を考えているのだろう。俺も見つめ返したものの、怒っているのか、喜んでいるのか、呆れているのか、全く読み取れなかった。

「……ロラン？」

　黙り込んでしまった俺を不信に思ったのか、レイが俺に話しかける。俺は、心の中で頭を振った。

　今は、そんな事を考えている場合では無い。

　俺が何のために、何を考えてここに戻ってきたのか、ちゃんと三人に話さなければならないのだ。

「その……俺、えっと、だな……」

　だが、いざその場面になってみると、思いの外、口が動いてくれない。イレギュラーな出来事があったのは確かだが、それでも何度か頭の中でシミュレートしてみたのだ。全く情けないことこの上ない。

　しどろもどろになってしまった俺に、テーブルについてから今まで無言を貫いてきた樹葉が、ずいっと俺の方にのめり込んできた。そして、徐に右手を俺の額の高さにまで上げてきて、

「――痛っ？」

　思いっきり、デコピンをかましてきた。

　ジンジンくる痛みに、額を手で押さえることによって和らげながら俺は、何をするんだというようなニュアンスを込めて樹葉を睨む。

　言葉にしなかった、いや、出来なかったのは、見えてしまったから。

　樹葉の目が、微かに涙で滲んでいることに、気がついてしまったからだ。

　向かいに座ってじっとしていた時は見えなかったが、こうして近くにまで来ると良く分かる。

　悲しみ、怒り、安堵、そして俺の貧相なボキャブラリーでは言い表せない何か。

　そんな感情が、彼女の目にはつまっていた。

「……樹葉？」

「心配した」

　短くそう言った樹葉の声は、はっきりと分かるくらいに震えていた。

　そして、もう一度ゆっくりと口を開き、

「すっごく、心配した」

　今度はしっかりとした声で、そう呟いた。

「……うん。そうだね。凄く心配した」

「……ですね。ホントに不安でしたよ？」

　レイと詠も、樹葉に同調して頷く。

　そんな三人を見て、俺も自然と口が動いていた。

「ごめん……本当に、ごめん」

　自分でも驚く程良く聞こえた自身の言葉。続けるのは、容易かった。

「裏切って、見捨てて、喚いて、逃げて、本当にごめん。でも――」

　不思議と、目が熱い。なんでだろう。

　分かったのは、

「心配してくれて、ありがとう」

　その言葉が、熱いそれが目を離れ、頬を伝わった後だった。